『伏見宮貞成の文学』

位藤邦生著

現在私どもが披見できる夥しい漢文日記は、〈古記録〉という語が示すように、第一等の史料としては重んじられても、その文学性が問題にされたことはほとんどなかった。十五世紀前半の政治・世相を克明に伝える、後崇光院・伏見宮貞成親王の『看聞日記』も、その埒外であったとは決して言えない。

本書は貞成親王の文業を広く視野に入れつつ、作品の文学性と作者・貞成親王その人に迫った、初めての成果ということができる。

本書の章構成を記せば次の通りである。

第一章漢文日記研究序説
第二章『看聞日記』の文学的研究
第三章伏見宮連歌会
第四章後崇光院の和歌
第五章『椿葉記』の世界

このうち前半二章は、史料としての価値の向こう側に置き去りにされてきた漢文日記の文学性を、『看聞日記』を中心に掘り起こそうとするものである。著者の長年の研究の中で最も主要な研究テーマとなっているものであり、紙幅の上では本書のほぼ六割を占める。

「文学を成り立たせる」ものを、「表現の充足によって保証され」た「主題」であると著者は言明する。「主題」には、「作者が意図した主題」と「読者が読みとる主題」とがあり、しかもこの両者は「同じ重みをもったもの」である。日記の記主が自分の人生を「よく記録(傍点稿者)」しつづけた結果、記主の「人生の課題」と重なりあう「主題」が、読者の前に立ち現れる。とするならば、この要件を満たす限りにおいて、漢文日記を文学として読むことができる—私見により第一章を要約すれば、論の主眼は以上のようになろうか。こうした前提より出発して、第二章では『看聞日記』の分析の実際が示される。第二章の分析は多彩である。「無力次第」「併神慮也」等、表現への切り込みは勿論のこと、詳細な人物考証も試みられる。漢文日記というジャンルの性質上、記主の対人関係を知らずに記事内容の正確な読みとりは叶わない。漢文日記に立ち向かうのに不可欠の検討である。こうした方法で浮かび上がるのは、記主・貞成がかかえていた緊張であり、その緊張は著者が読みとる『看聞日記』の主題「伏見宮貞成の生の苦悩」に密着せずにはいない。加えて、同時代の主要日記『満済准后日記』の検討が対置されることで、叙上の『看聞日記』の文学的特質が一層明確になる。

こう見てくれば、第一章と第二章との有機的連関は一目瞭然である。既成の文学観の見直しを迫る提言をも孕み、まさに質的にも本書の中枢と呼んで差し支えない部分であろう。

著者の文学観は、国文学研究の世界にあって、必ずしも主流とはいえない。しかし、著者が繰り返す「文学」という語は、『看聞日記』の分析の実際に支えられ

て、重い。私どもが「文学」「文学教育」などと口にする時、その「文学」ということばは往々にして、安易にあいまいに、流れてしまってはいないか。

失礼ながら、二章のみを取り立てた偏った紹介となってしまったのは、右のような不安にかられ、自分が平生用いる「文学」という語の軽さを恥じたためである。

（A5判　三八〇頁　平成三年二月発行　清文堂出版　九、六〇〇円）